

＝歴史と哲学の県立熊谷図書館＝資料案内

ラ イ ブ ・ レ タ ー



# Lib. Letter

2010 Spring [3～5月]季刊

平成22年3月31日 通巻 第19号

編集・発行 埼玉県立熊谷図書館



埼玉県

埼玉県のマスコットコハトン

<https://www.lib.pref.saitama.jp/> Tel 048-523-6291

## 哲学者 カール・R・ポパー

みなさんはカール・R・ポパーという人物を御存じでしょうか。2007年4月に刊行されベストセラーとなった『ブラック・スワン（上・下）－不確実性とリスクの本質』（ナシーム・ニコラス・タレブ/著）に紹介されている哲学者の一人です。ポパーは現在、多くの哲学者・数学者・物理学者に影響をあたえている哲学者なのですが、意外と人々に知られていません。

今回は、哲学者カール・R・ポパーと彼の哲学について取り上げます。

### ■ 初めての哲学的問題

カール・ライムント・ポパーは1902年オーストリアのウィーンに生まれました。弁護士であり歴史家でもあった父の影響により、幼いころから歴史・哲学の書物に親しみ、15歳の頃には初めて哲学的問題を父と論じ合います。このときの議論をきっかけとして、彼は本格的に哲学を学ぶようになります。



### ■ 言葉とその意味

「私の知的発展にとって決定的なものとなる最初の哲学的問題は、言葉とその意味（またはその「真の意味」）を重要視する態度を私が拒否したことから生じた。」と彼は語っています。

彼は父親からストリンドベリ※の自伝的著作をよみ、父との会話で批評してごらんと促されます。彼はストリンドベリの著作から、－ある言葉の「真の」意味からなにか重要なものを引き出そうとする企て－を感じ取り、それに反論します。

「言葉やその意味についてけっしてあれこれ論じないという原則をつねに念頭におかなければならない、そのような議論はまやかして無価値なものだからである」と。

ポパーは必死に父親を承服させようと試みますが、父親が彼の問題としている点（言葉の意味について論じるべきでない）を理解していないと知り、ショックを受けます。

この当時、「重要なのは言葉の意味、とりわけ定義である」という信念がひろく受け入れられていました。彼の父親もストリンドベリもそのように考えていたのです。

※ストリンドベリ【August. Strindberg】スウェーデンの劇作家・小説家

### ■ 重要なのは言葉の意味ではない

どうしてポパーは「言葉の意味について論じるべきではない」と言ったのでしょうか。彼はこのように述べています。「言葉とその意味についての問題を本気になってとりあげようなどと力んではならぬ。本気になってとりあげなければならないのは、事実の問題であり、事実についてのさまざまな主張（もろもろの理論および仮説）それらが解決する問題およびそれらが提起する問題である。」

またこうも述べています。「正確さのための正確さ—とりわけ言語的正確さ—を増大させようとつとめるのはいかなる場合にも好ましくない。なぜかという、それはたいてい明晰さの喪失に、または問題の真の前進によって無視されてしまうので、結局のところ無駄になってしまう事前作業への時間と労力との空費に終わるからである。問題状況が要求する以上に正確を期そうなどとけっして試みるべきでない。(主張の) 明確さの増大はすべて本来的に知的価値のあるものである。(言葉の) 正確さ、精密さの増大は、ある一定の目的に対する手段としての実用的価値しか持たない。」

## ■『探求の論理』

1918年、ポパーは中等学校をやめ、ウィーン大学に入学します。さまざまな講義を聴くなかで、数学と理論物理学に強い関心を持ち、大学で数学と物理学の教員免許を取得します。その後、指物師になるために年季奉公に行きますが、(この頃の彼は、「自分たちはいずれ労働者階級の指導者になる」という学友たちの考えに強く反発し、自分は労働者になろうと考えていました。) 哲学への思いを諦めきれず、年季奉公が終わると寄るべなき子供たちの面倒をみる社会事業従事者(保育所教師)となります。1925年、ウィーン市が設立した「教育研究所」に入学し、そこで哲学・心理学を学びます。1928年に学位をとり、1929年に中等学校の数学と物理学の教師資格をとったころ、伯父の計らいで、ウィーン学団のメンバーの一人、ヘルベルト・ファイグル※と対談することになります。自身の哲学的見解をファイグルに話したところ、本にして出版することをすすめられ、1934年に著書『探求の論理』を出版します。(この著書は、出版する際に無理やり半分編集されてしまい、掲載されなかった分は現在ほとんど残っていません。掲載された分は、『科学的発見の論理』(『探求の論理』の英語版)に掲載されています。)

※ヘルベルト・ファイグル【Herbert Feigl】哲学者。ウィーン学団(ウィーン大学の哲学教授モーリッツ・シュリックを中心とする科学者、哲学者の研究グループ)のメンバーの一人。

## ■反証可能性

ポパーは『探求の論理』で、「反証可能性」という考え方を説明しています。

「反証可能性」とは何でしょうか。それは、ある理論が科学的であるか非科学的であるかの境界設定は、その理論が「反証」(間違っていると証明すること)できるかどうかで判断できるというものです。それまでの考え方、特に自然科学の世界では「実証」(正しいと証明すること)を積み重ねることで、理論を正当化しようという考え方が広く受け入れられていました。しかし、いくら「実証」を積み重ねたとしても、一つの「反証」によってその理論は覆されてしまうことがあります。

たとえば、今まで「白鳥というものは白いものだ」と考えられてきました。数々の「実証」(白い白鳥を見たという観察結果)がそれを示していました。しかし、オーストラリアで黒い白鳥が発見されたとき、今までの「実証」は黒い白鳥を発見したというたった一つの「反証」によって覆されてしまったのです。

「実証」を求めるのではなく「反証」を求め、自身の理論をより発展させることが大切だと、彼はこの著書で述べています。

## ■『歴史的法則主義の貧困』と『開かれた社会とその敵』

『探求の論理』の影響により、さまざまな国から講演の招待をうけるようになったポパーですが、このころ、オーストラリアにもナチスドイツの影響が及んでいました。ポパーはその影響から逃れるため、1937年ニュージーランドに移住します。(彼の両親はいずれも洗礼を受けたプロテスタントですが、ユダヤ教徒の生まれでした。)



1938年、ヒトラーがオーストリアを占領。そのニュースを聞き、ポパーは全体主義とマルクス主義を批判する彼の政治的見解をまとめた『歴史法則主義の貧困』と『開かれた社会とその敵』の執筆を決意します。そして、友人であるエルンスト・ゴンブリッチ※とフリードリッヒ・フォン・ハイエク※の援助を受けて1945年に出版します。

※エルンスト・ゴンブリッチ【Ernst. Hans. Josef. Gombrich】オーストリア系ユダヤ人の芸術史家。

※フリードリッヒ・フォン・ハイエク【Friedrich. August. von. Hayek】オーストリアの経済学者・哲学者。オーストリア学派の代表的学者の一人。

## ■歴史は繰り返さない

この2冊の著書でポパーは、プラトンから続く「全体主義（人間をその愚行や邪悪から救済するためには強力な社会的伝統や、強い権力を確立する必要があるという考え）」と「歴史法則主義（過去に起こった事と未来に起こる事の類似性を発見し、その類似性の法則から未来を予測すること）」を批判しています。特に「歴史法則主義」に関しては次のように私たちに訴えています。

「歴史は繰り返さない。過去と未来には類似性はなく、われわれは過去から未来を予測することはできない。過去と未来に因果関係は存在せず、未来は規則的でなく不規則に変化する。過去は過去であり、過去に必要な以上の意味を与えてはならない。われわれがしなければいけないことは、未来を予想することではなく、**今ある状況を理解し、そこから何をすべきかを導きだすことだ**」と。

1945年、彼はイギリスのロンドン大学に招かれて同大学の科学方法論の教授を勤めます。退職後も精力的に活動を続け、数々の著書を執筆します。そして、1994年9月17日、ロンドン南部ソールトン・ヒースのロンドン大学付属病院で亡くなります。

ここにあげた哲学的見解は彼の哲学のほんの一部にすぎません。実際にポパーの著書を読み、考え、哲学を皆さんのこれからの人生の一部にしていただければと思います。

※本文の引用は全て『果てしなき探求 知的自伝 上・下(同時代ライブラリー)』によります。

## ■ より詳しく知りたい方へ ～県立熊谷図書館にある関連の資料～

(K・ポパーの著作物)

- ・『果てしなき探求 知的自伝 上(同時代ライブラリー)』森博/訳 岩波書店 1995.12【熊133.1/P81/】
- ・『果てしなき探求 知的自伝 下(同時代ライブラリー)』森博/訳 岩波書店 1996. 2【熊133/P81/】
- ・『推測と反駁 科学的知識の発展』藤本隆志/訳 法政大学出版局 1980. 3【熊104/ス/】
- ・『開かれた社会とその敵 第1部 プラトンの呪文』内田詔夫/訳 小河原誠/訳 未来社 1980. 3【熊104/ポ/】
- ・『開かれた社会とその敵 第2部 予言の大潮』小河原誠/訳 内田詔夫/訳 未来社 1980. 6【熊104/ポ/】
- ・『フレームワークの神話 科学と合理性の擁護(ポリエーシス叢書 39)』M. A. ナッターノ/編 ポパー哲学研究会/訳 未来社 1998. 6【熊133.5/フレ/】
- ・『現代心理学入門 7 知覚』岩波書店 1976【熊140. 8/ゲ/】
- ・『よりよき世界を求めて(ポイエーシス叢書 30)』小河原誠/訳 蔭山泰之/訳 未来社 1995. 12【熊104/ヨ/】
- ・『自由社会の哲学とその論敵』武田弘道/訳 世界思想社 1980. 4【熊104/ポ/】
- ・『自由社会の哲学とその論敵[1](本編)』武田弘道/訳 世界思想社 1977【熊134. 8/ジ/】
- ・『自由社会の哲学とその論敵[2](注の部)』武田弘道/訳 世界思想社 1977【熊104/ポ/】

- ・『現代思想 6 批判的合理主義』ダイヤモンド社 1974【浦308/ゲ/】
- ・『科学的発見の論理 上・下』大内義一/訳 森博/訳 恒星社厚生閣 1984. 7【久401/ポ/】
- ・『開かれた宇宙 非決定論の擁護』小笠原誠 /訳 蔭山泰之/訳 岩波書店 1999. 11【久401/ヒラ/】
- ・『実在論と科学の目的 上・下』小河原誠 /訳 蔭山泰之/訳 篠崎研二/訳 岩波書店 2002. 3【久401/シツ/】
- ・『量子論と物理学の分裂』小河原誠/訳 蔭山泰之/訳 篠崎研二/訳 岩波書店 2003. 11【久421.3/リヨ/】

#### (共著)

- ・『自我と脳 上・下』カール・ポパー, ジョン・C. エクルズ/共著 西脇与作/訳 思索社 1986【熊141.9/ジ/】
- ・『未来は開かれている』カール・ポパー, コンラート・ローレンツ/共著 F・クロイツァー/編 思索社 1986. 11【熊104/ミ/】
- ・『開かれた社会－開かれた宇宙(ポイエーシス叢書 14)』カール・ポパー, フランツ・クロイツァー/共著 小笠原誠/訳 未来社 1992. 9【熊104/P81/】

#### (K・ポパーについての著書物)

- ・『ブラック・スワン(上・下)－不確実性とリスクの本質』ナシーム・ニコラス・タレブ/著 望月衛/訳 ダイヤモンド社【浦304/フラ/】
- ・『人と思想 85 ポパー(century books)』川村仁也/著 清水書院 1990. 4【熊108/ヒ/】
- ・『カール＝ポパーの哲学』高島弘文/著 東京大学出版会 1974. 2【熊133. 5/タ/】
- ・『批判と挑戦 ポパー哲学の継承と発展にむけて』小河原誠/編 未来社 2000. 9【熊133. 5/ヒハ/】
- ・『ポパー哲学の挑戦(フィロソフィア双書 18)』W・W・バートリー/著 小河原誠/訳 未来社 1986. 12【熊133. 5/ポ/】
- ・『哲学と現実世界 カール・ポパー入門』ブライアン・マギー/著 立花希一/訳 恒星社厚生閣 2001. 2【熊133. 5/テツ/】
- ・『ポパーの科学論と社会論』関雅美/著 頸草書房 1990. 8【熊133.5/ポ/】
- ・『ポパー 批判的合理主義(現代思想の冒険者たち 14)』小河原誠/著 講談社 1997. 3【熊108/ケン/】
- ・『ポパーとウイトゲンシュタイン ウィーン学団・論理実証主義再考』ドミニック・ルクール/著 野崎次郎/訳 国文社 1992. 7【熊116/L49】
- ・『社会科学の哲学 ポパーとフランクフルト学派の「あいだ」(社会科学選書)』遠藤克彦/著 世界書院 1991. 4【熊133.5/シ/】
- ・『批判的合理主義の思想(ポイエーシス叢書 44)』蔭山泰之/著 未来社 2000. 10【熊133.5/ヒハ/】
- ・『開かれた哲学と開かれた社会 カール・ポパー批判』モーリス・コーンフォース/著 城塚登/訳 紀伊国屋書店 1972【浦309.3/ヒ/】

#### 【WEBサイト】

- ・「日本ポパー哲学研究会」 <http://fs1.law.keio.ac.jp/~popper/popper/index-j.html>



彩の国さいたま

※上記以外にも、県立図書館ではK・ポパーに関する資料を所蔵しております。ご希望の資料がございましたら、お気軽にお問い合わせください。